

正気としての狂気について

—吉田おさみの狂気論の検討—

○ 名古屋市立大学 樋澤 吉彦 (3742)

キーワード：狂気 病識 治療

1. 研究目的

本研究は、専門家により「精神病」者と規定された者に対する「治療」に潜む健常者性を顕在化させたうえで、社会によって「病」化された狂気を逆に貫徹することにより、「精神病」者としての立場から「狂気こそ正気」という価値の転換を志向した吉田おさみ（1931年-1984年）による狂気論の検討を目的としている。

2. 研究の視点および方法

吉田は精神病を狂気と規定し、狂気であること自体がすでに反差別運動であると位置づける。それは決して精神病患者であることによる社会からの排除・迫害や治療・矯正に対抗する反差別／障害者解放運動の産物としてではない。

さらに吉田は、「対等な関係」にもとづく「全人的」な治療や支援を志向する「良心的」専門家は結局のところ狂気そのものについては「なおす」べき「病」と前提している時点で病者を否定する社会と親和的であるとして彼らを断罪する。吉田のいう「治療」とは専門家の志向する「寛解／改善／社会復帰」とは異なり「狂気の貫徹」なのである。

本研究では以上の吉田狂気論の概要を検討の土台としたうえで、(1)吉田の狂気の捉え方、(2)吉田の治療／治療者論の2点について吉田の論考解題を通して検討を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は文献研究となる。そのため特に「日本社会福祉学会研究倫理指針第2指針内容A」を遵守している。なお、本研究の引用文献については本原稿分も含めて紙幅の関係上すべて当日配布資料に記載する。

4. 研究結果

吉田は精神医療において「その出現が寛解度の指標」とされる「病識」が欠如しているということの意味を問うかたちで自身の狂気論を展開している。その前提として吉田は病気を「反価値判断」と位置づける。通常、病による痛みや苦しみを認識するのは第一義的には本人となる。病とは本人に反価値判断の指標としての「病識」が出現することが治療開始の動機となる。しかし「精神病」の場合、「社会」が反価値判断した際に本人の意思に

かかわらず「治療」が開始される。その結果、本人に「病識」が出現すると治療者側からは「寛解」に向けて「前進」したと判断される。吉田は絶対的な価値として在る健常者社会に表象される「正気」の世界に抗して、いわゆる「社会因説」に帰着させることなく、「治療」により「精神病」という「病」に矮小化されてしまう狂気を「周囲社会（健常者社会）の抑圧に抗して自己を解放しようとする反逆の一つの形態」と位置付け、価値相対化を試行するのである。

吉田狂気論は必然的に精神医療における治療批判に接続される。吉田狂気論に従えば、本来「精神病」は病などではなく健常者社会に対する反逆の一形態としての狂気であるのだから治療の対象にはならないことになる。したがって吉田の治療批判の核心は治療そのものの否定にある。またここでいう治療とは、隔離・拘禁を主とする消極的且つ対処療法的な対応ではなく、患者の社会復帰までも視野に入れた「良心的」且つ「全人的」な「効果」のある治療を指す。吉田はむしろ隔離・拘禁を主とした対処療法的処遇のほうが、狂気（治療者側からみれば病の症状）の減退に結び付きにくかったため、狂気は狂気としてそれを維持し続けることが可能であったという。また治療を否定するということは、「対等な関係」の志向や「良い治療／支援」の志向などは、狂気を「なおす」べき「病」と前提している時点で意味を持たないことになる。吉田によれば、専門家は生業としての「専門家」であることを字義どおりやめることにより、はじめて「病」者との対等な関係を取り結ぶことが可能となるのである。

5. 考察

吉田の主張に沿えば、精神医療にかかわる専門家は資格を捨て所属を放棄したうえで、制度の枠外において自らが習得した専門技法を「病」者の意に沿うかたちでのみ活用すべき、ということになる。それが難儀なのであれば専門家は、せめて余計なことはせず、また「全人的かかわり」などを志向しようとせずに病者の要請にのみ応えるかたちで必要最低限の治療／支援を行うべきである、ということが吉田狂気論の帰結となる。

吉田は治療（特に「効く」クスリ）を否定しつつも、病者の要請に限定された治療については、それが狂気の減退を招くものでもあるということとの葛藤のなかでやむなく承認している。吉田は、種々の「想念、疑念」というかたちで自身を苦しめ続けてきた「症状」をみごとにまで減退させるクスリの力によって皮肉にも狂気の価値相対化が可能になったという不条理と対峙しながら自身の狂気論を展開している。

*本報告は、平成25年度科学研究費基盤研究(C)「医療観察法が精神保健福祉士の価値に与える影響に関する研究」（課題番号25380747・研究代表者：樋澤吉彦）による研究成果の一部である。